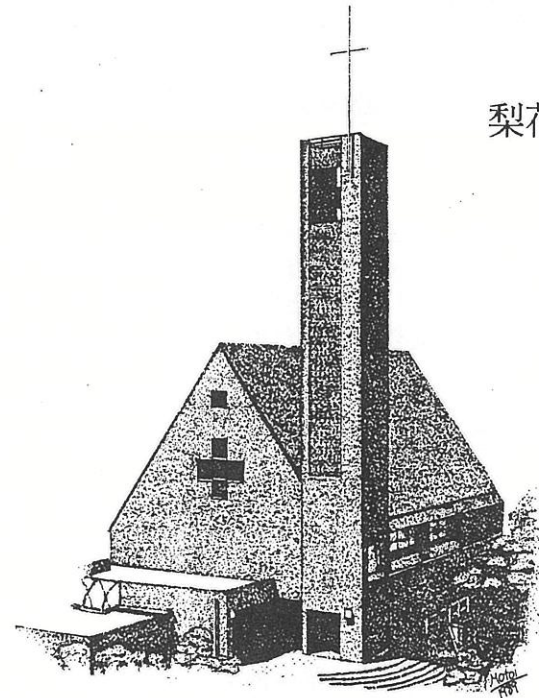


チャペル ブックレット No.3

——名古屋学院大学 開学25周年・
外国語学部開設 記念講演会記録——

国際化時代における キリスト教の使命

梨花女子大学 教授
徐 洸 善



名古屋学院大学 宗教部



徐 洸善先生のご紹介

ソ・クワンソン先生は、1931年、日本植民地支配下の朝鮮で、牧師の家庭に生まれました。父親が日本官憲の弾圧を逃れて、旧満州で伝道したため、旧満州の日本人中学校に入学、3年生のとき、解放を迎えました。その後、父親はピョンヤンで伝道、殉教されたため、南北分断の悲劇を体験されました。

1966年、ニューヨーク・ユニオン神学校に留学、1970年、ナッシュヴィル・ヴァンダビルト大学で宗教、哲学を学び哲学博士号を取得されました。

1964年、梨花女子大学講師をへて、1974年より教授に就任。現在、梨花女子大学キリスト教学科で、宗教および哲学を講じるとともに、大学チャプレンの要職を兼ねておられます。

1970年代の韓国民主化闘争に積極的にかかわり、その実践から生れてきた「民衆の神学」構築の代表的神学者として、世界中から注目されているお一人です。著書に、「人間と宗教」「民衆の神学」など多数あります。

1989年10月9日、本学の開学25周年・外国語学部開設記念講演会で講演されました。

虐殺された父

今年のお盆も一韓国語でチュウソク（秋夕）と申しますが一私は私の父親の墓を訪ね、墓の上の雑草を刈り、そして祭礼を守ることができませんでした。

ソウルの北、車で1時間くらいの所にある私の妻の父母の墓を家内と子供たちと訪ねてチュウソクの礼をあげたのであります。

その時、子供たちは「お父さんのお父さんの墓にはいつ行けるのでしょうか」と聞きました。私の父の墓は北にあります。それは純真な質問でしたが、私は悲しく、また怒ってしまいました。

私の父は、北の首都ピョンヤン（平壤）で牧師として働いていたのですが、南へ避難することを心苦しく思っていました。それは教会の人達を見捨てて南の安全な所へ逃げることで、それは神様の仕事から逃げるのだと考えたので、南に避難はしませんでした。

北の共産独裁政府に対して、批判的な説教をし、自由とか解放とかを説き、教会の人々に慰めと希望をあたえるのを使命と思っていた父は、1950年6月、韓国戦争（注1）が起ってすぐ、北の秘密警察に拉致（らち）され行方不明になったのであります。

北の軍隊に引き込まれるのを避けて、隠れ

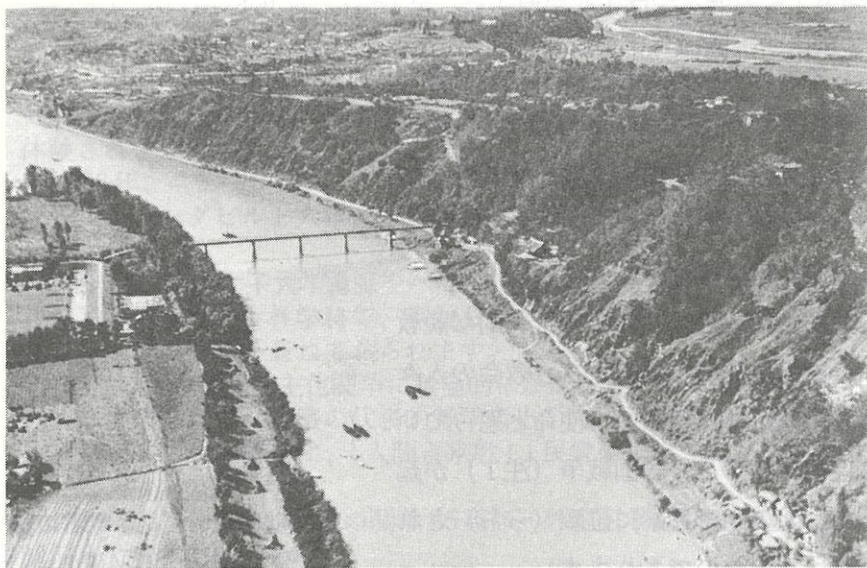
（注1）韓国戦争

朝鮮戦争のこと。朝鮮の統一をめぐる南北の対立から、小規模の武力衝突をくり返した後、1950（昭和25）年6月25日、半

ていた私は、その年の10月、ピョンヤンが国連軍と南の軍隊によって陥落された時、拉致された父や他の牧師たちや長老たちの行方を探し始めました。数百、数千名の良民が逃亡兵によって虐殺されたのですが、その死体の中に全身に弾痕を受けた父親の死体を見つけることができました。

ピョンヤンの10月は寒い風が厳しく、大同江（テトンカン）の下流の沿岸に捨てられた父の死体は、他の五人の牧師さんといっしょに後手に縛られていました。

私は父をピョンヤンの南、大同江が見える丘に埋葬して、後退する国連軍といっしょに南へ下りていきました。そして南の海軍に少



写真は平壤郊外を流れる大同江

島を二分する全面戦争に突入。南に国連軍、北に中国義勇軍が加担して戦火が拡大し、休戦交渉をくり返した後、1953年7月に終結した。

この戦争によって南北を問わず国土は瓦礫と化し、人口の割以上を失い、離散家族は500万人にものぼり、分断の固定化、民族対立など、今日に至るものなおいやされぬ深い傷を残した。

年通信兵として入隊し、韓国戦争で戦いました。今、私が使っている日本語は、私が中学生の時に習った、教科書的な日本語であります。

「天皇は人間です」

私の父は日本の植民地政府が強制した神社参拝（注2）を拒否し、創氏改名（注3）に反対したという理由で牢屋に行き、私達子供の前で殴られ、「満州」（注4）に亡命しました。

反日民族主義青年牧師として、厚い信仰と若い民族主義で貧しく生きた不逞（ふてい）朝鮮人だったのであります。

天皇とキリスト教の神様、エホバとどっちが偉いか、というのが憲兵隊の質問でした。その質問に対して、私の父は「もちろん神様です」と答えました。憲兵隊が「天皇も神様だぞ」と言うのに対し、父の「天皇は人間です」というふるえるような声といっしょに、「アイクー」という悲鳴が、憲兵隊舎の前に立っていた私と私の母の耳と胸をうつのは、日常茶飯事だったのです。

私が日本語で話す理由

私は「満州」で育ちました。そこで国のな

（注2）神社参拝の強制

日中戦争（1937年7月）開始とともに、朝鮮を中国侵略の兵站基地（へいたんきち）と位置づけた日本は、朝鮮民族を戦争に総動員し、「身も心も形も精神も日本人に」するため推し進めた皇民化政策の一つで、朝鮮民族に神社参拝、神棚の設置、宮城遙拝などを強制した。

神社参拝を拒否した約2000名のキリスト教牧師・信徒が検挙・投獄され、200近い教会が閉鎖、50名あまりが獄死した。

（注3）創氏改名（そうしかいめい）

皇民化（天皇の臣民に同化させる）政策の一つで、1939（昭和14）年、朝鮮民族固有の姓名を奪って、日本式の氏名を名乗らせた。

このような暴挙に批判的な日本人もいて、演出家・俳優として有名な千田是也氏は、KOREAをペンネームとした。

（注4）満州国

現在の中国東北部で、1932

い少年時代をおくりました。亡命した不逞朝鮮人の息子の悲しみを経験しながら、解放と独立の望みだけを信仰として育ちました。

「満州」の日本人中学校に、からくも入学を許可されて、日本人の国語の先生の厳しい日本語教育のチャレンジを受けて、日本人の子供たちより立派で、じょうずな日本語を使おうと、負け惜しみをもっていたのです。

日本語を強制的に習わされた韓国人が、今60才近い老人になって、まだまだ日本語を忘れていないという事実を、日本人の皆様にも、そして若い友達に会って見せているのは、国と言葉と名前までも失った一人の人間の悲しみ、韓国の歴史の悲劇を皆様と一緒に考えたいと思ったからであります。

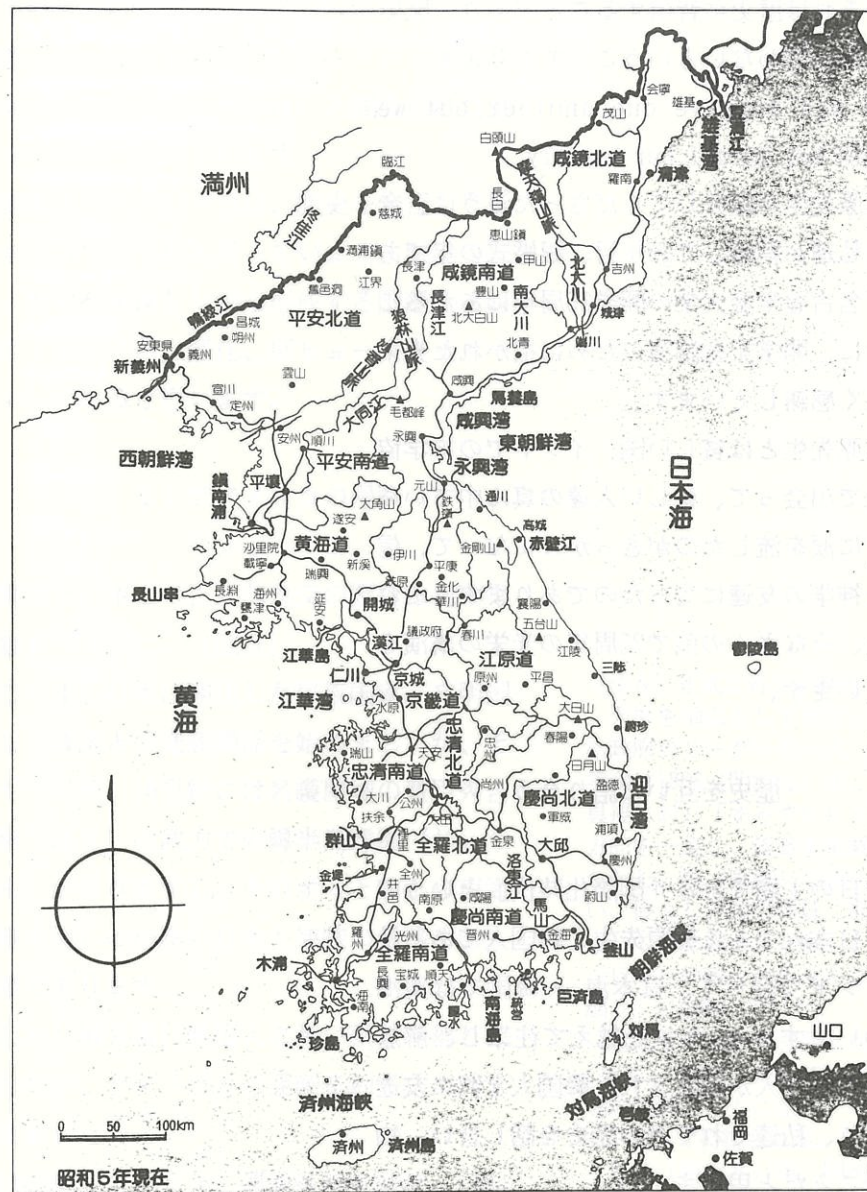
母国語を奪われた悲しみ

私の経験は私一人だけのものではなく、韓国人の歴史であり、そして共に日本人の歴史であると思うからです。

日本語で話すのは難しいばかりでなく、悲しいのであります。なぜなら、朝鮮語をとりあげられ、日本語を強要されたからであります。私が日本語を使うのは韓国人と日本人の悲しい歴史の結果なのであります。

その歴史をForgive、許すことはできましよう。しかしその歴史を忘れることはできませ

(昭和7)年3月、日本が作ったかいらい国家。1945年消滅。



1930 (昭和5) 年当時の朝鮮全図

ん。それは歴史に背信することであり、歴史から何も習わないということでもあります。

We may forgive one another, but we should not forget our history.

梶原先生が紹介して下さったように、今年には私達が結婚して25年目、銀婚式の年であり、名古屋学院大学の開学25周年にあたるこの年に、開学記念講演のために招かれた光栄を深く感謝しています。

梶原先生とは貧しい国、インドでの神学協議会で出会って、貧しい人達の真ん中でいっしょに涙を流したのがきっかけになって、信仰と神学の友達になったのであります。それで今、みなさんの前で25周年の光栄の講演をしています。

歴史を互いに語り合う

今日の主題である「国際化時代」というのは、日本人である梶原先生と韓国人である私がインドで会って、日本海—韓国では東海といいますが—それを越えて往来し、解放された日本人が解放された韓国人と共に友達になり、私達それぞれの歴史を話し合い、物語るのだと思います。

国際化というのはコミュニケーションの問題であり、コミュニケーションというのは、それぞれの民衆の物語を話し合うことだと思

っています。

歴史意識のない話はコミュニケーションではなく、歴史のない物語は、人間を忘れた空カラの話だと思っています。

国際化時代というのは、歴史を無視して形成するのではないと思っています。歴史を忘れ、歴史を無視しながら形成する国際化は奴隷化であり、非人間化、反ヒューマナイゼーションであると思います。

日本、そしてアメリカの侵略

韓国と日本との正式な外交の歴史は1876年に始まりました。(注5)

この年、日本は開化した民族国家、文明国として韓国との通商関係を始めましたが、そのずっと前、16世紀には名護屋城の豊臣秀吉将軍(注6)の武力での韓半島蹂躞(じゅうりん)がありますし、そのずっと前から東海(日本海)の沿岸に日本人海賊の侵略があったのであります。

しかし第2番に韓国人の長い眠りを揺り起したのが、アメリカとの通商条約を結ぶ時でありました。

1882年、アメリカと通商条約を結び、1884年、最初のプロテスタント系のアメリカの宣教師が朝鮮に入国した、いわゆる19世紀末、隠遁の国、Hermit Kingdom そしてLand of

(注5) 正式な外交の歴史

天皇を頂点として発足した明治政府のリーダーの一人、木戸孝允は1868(明治元)年、岩倉具視に対し「すみやかに天下の方向を一定し、使節を朝鮮につかわし、彼(朝鮮)の無礼を問い、彼もし不服の時は、罪を鳴らしてその国土を攻撃し、神州(日本)の威を伸長せんことを願う」と提案していた。

無礼も鳴らすべき罪も何も無いのに「征韓」の企ては天皇の専制政府とともに生れ、その後も一貫して持続された。

1875(明治8)年、明治政府は軍艦をソウルの表玄関、江華島に侵入させて、開国を迫り、1876(明治9)年2月、日韓修好条規(江華条約ともいう)を締結した。

morning calm という国が、長い眠りから揺り起される激動の時代でありました。

アメリカの宣教師たちは最初、直接伝道よりも教育と医療活動を展開して、色々な学校を始めましたが、近代女子教育の中心となった、梨花女子大学（注7）もその時始められました。そして病院を建てて医術を普及させたのであります。

宣教師たちの伝道は上級社会よりも、下級労働階級と、女性を対象にして、漢字文化よりも、朝鮮語文化をすすめる聖書をハングル、韓国の言葉で翻訳したのであります。

しかしキリスト教を中心として集った人達は、当時朝鮮社会の知識人リーダーであり、日本とアメリカに留学した、愛国青年志士達で、政治運動団体である、「独立協会」（注8）の指導者たちでありました。

日本への期待と警戒

朝鮮のキリスト教青年たちは、内には反封建、開化主義運動者たちであり、外に対しては反外勢民族主義者であったと、特徴付けることができます。

神学的に言えば、韓国のクリスチャンは、宣教の最初、福音を「政治的」に理解したのであります。封建的社会を開化し、文明世界へ解放し、先進近代国家の政治的体制を持つ

1853年、ペリーひきいるアメリカ軍艦によって、アメリカとの不平等条約を締結させられた同じ手口を、朝鮮に使った。

（注6）豊臣秀吉（1537～98）全国統一をすすめる秀吉が領土拡張を目的として、1592（文禄1）年から1598（慶長3）年まで起した朝鮮侵略戦争。文禄慶長の役ともいう。

名護屋城は秀吉が1591年、現在の佐賀県鎮西町に朝鮮出兵のために築城したものの。

（注7）梨花女子大学

1886年、アメリカのメソジスト監督教会より派遣されたメアリー・スクラントン宣教師によって創設された。当初、小学校として出発したが、生徒はたった一人であったため今日でも英語名をEwha Womans Universityと単数形を用いている。

1904年女学校を、1910年大学を開設、現在は11大学、54学部を擁する総合大学である。

（注8）独立協会

1896（明治29）年、朝鮮の独立・自由・人権を主張して結成された、初めての民族主義的団体。当初は、革命的な官僚の社交場であったが「独立新聞」の発行、「独立門」の建設、「万民共同会」という大衆集会の開催などを通じて、広範な大衆の支持を得た。1898年、弾圧によって組織的に壊滅させられるが日韓併合前夜に名乗りをあげた

独立文明国家として発展する精神的基盤を、西欧キリスト教に発見したのであります。しかしこの歴史的事業は民族主義的覚醒なくしては達成ができません。中国大陸に対する数百年の隷属状態を精算するためには、日本の近代化から力を得ようと考えた人々においては、また同時に、日本の帝国主義を警戒しなければならないという事実があったのです。

日本はやはり外勢であり、日清戦争以後朝鮮の自主的革命勢力を抑圧する反動勢力、そしてキリスト教の愛国青年の敵となつてあります。この視点は正確であり、歴史意識もった正しい判断であったと思います。

国を失った恨み

日清戦争で歴史的宗主国であった大国の中国に勝利した日本が、また北の大国ロシアを惨敗させた一連の大事件（注9）は、韓国人をびっくりさせたのは当たり前でありました。びっくりしている中に1905年、いわゆる保護条約を強要させられて、独立国家としての体裁を失い、名実共に日本の属国に飲み込まれたのであります。（注10）

独立協会とか万人共同議会という独立運動をしていた青年たちはキリスト教会に集まりました。そして東学農民革命に参加して、犯罪

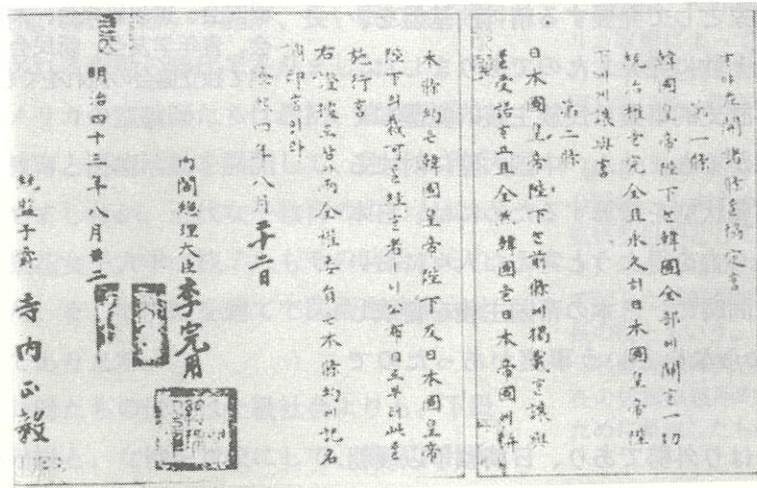
保安会、憲政研究会、大韓自強会、青年学友会、新民会などすべて独立協会の流れをくむ。

（注9）一連の大事件

一連の大事件とは、日清戦争（1894～95）閔妃暗殺（1895）、日露戦争（1904～5）などをさしている。いずれも、朝鮮の属国化と中国東北（満州）の分割をめぐる引き起された戦争や事件。

（注10）保護条約の強要

「乙巳（いつみ）保護条約」ともいう。日清・日露戦争に勝利した日本は、欧米列強の承認



写真は、日韓「併合」条約の正文

第一条に韓国皇帝は天皇に「一切の統治権を完全かつ永久に譲与する」とし、第二条に天皇は「譲与を承諾し、韓国を日本帝国に併合する」と書いて、この「併合」があたかも韓国皇帝の自発性によるもののようにみせかけたが、実質は「植民地化」であった。この日、韓国の名は世界地図から消えた。

石川啄木は「地図の上朝鮮国にくろぐろと墨をぬりつつ秋風を聴く」と心重く歌っている。

人と呼ばれた青年たち、抗日義兵運動に参加した逃亡兵たちは、みんなキリスト教会を宗教的避難区域（Sanction）として逃げてきました。

国を失った恨み、韓国語ではハン（恨）とありますが、戦争に負けた悲しみを教会に持ってきたのであります。

そして新しく習ったキリスト教式のお祈りの中で、「抗日独立」の熱を吐き出していたのであります。そのようにキリスト教会は反日運動の拠点にならざるを得なかったのであ

を得て、あからさまな朝鮮支配をめざした。

1905年11月、天皇の親書をたずさえた伊藤博文は、軍隊・憲兵隊・警察の監視下で、国王、大臣らに条約の調印を迫り、国王、大臣らの賛成を得ることなく、強引に調印させた。

これによって、日本は朝鮮の外交権を奪い、ソウルに統監府において、内政を支配し、独立国家としての体裁を奪った。

ります。アメリカの宣教師たちは、韓国のキリスト教が反日的民族主義的独立運動の中心として政治化するのに対して、危惧心を持ち始めました。

アメリカの宣教師たちは伝道と啓蒙を最優先と考え、教会を殖やしていくことに最も力を注いだので、歴史とか政治の問題は宗教の関心外のものと考えたのであります。

そして大部分のアメリカの宣教師たちは、朝鮮人は日本人から習うべきものがたくさんある、そして日本は朝鮮を開化し、近代化するために必要な国である、ということを公言するくらい親日的でありました。

キリスト教は最大の敵

それで最初の朝鮮統監、伊藤博文（注11）はアメリカ宣教師たちを説得して、朝鮮キリスト教が政治化するのを防止する政策といっしょにキリスト教の抑圧政策を、日本の政府は取り始めたのです。

日本の朝鮮侵略政策において、キリスト教は最大の敵であったのであります。

当時、日本のロシア戦争の講和で問題を取り扱ったアメリカは、フィリピンを受取り、日本が朝鮮へ進出するのを黙認することによって、日米関係が親しくなった背景を考えれば、アメリカ宣教師たちが日本植民地政府に



（注11）伊藤博文（1841～1904）長州・萩の出身。明治維新の元勳。1885（明治18）年、内閣制度発足とともに初代の総理大臣に就任。明治憲法制定など、天皇制確立に尽力した。日清戦争の責任者、乙巳保護条約の全権大使、初代の朝鮮統監。

1909（明治42）年、10月26日当時の満州・ハルビン駅で、朝鮮の独立運動家・安重根（アン・ジュンゴン）によって射殺された。

協力して、キリスト教会内の抗日独立運動を抑圧し、そして非政治化するの、当然であったのであります。

しかし日本の軍部にとっては、韓国のキリスト教運動は抗日的であり、政治的であり、また民族主義運動として危険なものであります。韓国のキリスト教をそのまま続けるといふのは、日本の植民地政策を中断するものとして決定的な問題であったのであります。日本軍部は、韓国のキリスト教を宗教的なものとしてだけとらえているのではなく、政治運動、そして民族主義運動としてとらえていたのであります。

日本の朝鮮支配

1910年、最初の朝鮮総督として来韓した寺内正毅（注12）が、ヤールリバー（鴨緑江）の鉄橋の竣工式に参席した時、彼を暗殺する陰謀を企てたとして、134名もの人々を逮捕して、1913年までに105人のキリスト教の青年を投獄、拷問、裁判をしたのであります。この事件を「百五人事件」といいますが、これはキリスト教指導者抑圧事件であり、韓国キリスト教運動の弾圧事件でありました。1917年は20世紀の世界において、画期的な年であるというのは、あまりにあたりまえのことだと考えます。

（注12）寺内正毅（1852～1919）伊藤博文と同じ長州の出身。1909年第三代朝鮮統監として就任。日韓「併合」を実現し、そのまま初代の朝鮮総督に就任した陸軍大将。

寺内総督は天皇に直属し、朝鮮における立法・司法・行政・軍の一切の権力を集中し、植民地化を制度化した。

全国すみずみまで、憲兵を配して日常生活を監視し「土地調査事業」を興して土地を奪い、「会社法」を公布して産業をつぶし、日本の資本進出を助け、「朝鮮教育令」によって、皇民

1917年、第一次世界大戦で近代化戦争を経験しまして、そしてその同じ年に、ロシアの共産革命の年として、今までそのショックを感じているのは事実であります。

第一次世界大戦の終戦は、世界被圧迫民族の独立を約束（注13）したので、朝鮮の愛国青年たちには政治的福音であったのであります。

三・一独立運動の担い手

1919年の「三・一独立運動」（注14）は韓国キリスト者の世界平和独立運動へのレスポンスであったのであります。

アメリカ宣教師たちの、韓国キリスト教非政治化運動にもかかわらず、そして日本の植民地政府の組織的な抑圧と監視にもかかわらず、韓国のキリスト教徒たちは、福音を民族独立と解放のメッセージとしてとりあげていたのであります。

その時代の宣教的使命は、民族の自主独立であると規定したキリスト教独立運動は、日本帝国の心臓部で進行していました。

1919年2月8日、在日韓国YMCAで朝鮮青年独立団というものを結成して、「独立宣言書」を朗読した（注15）のがその初めでありました。

1919年3月1日の「独立万歳運動」は非暴

化政策を進めた。

土地や仕事を奪われた人々は次々と日本に渡航してきた。ここから在日朝鮮人の歴史が始まった。

（注13）民族自決権

第一次世界大戦（1914～18）は、同盟軍・連合軍あわせて3000万人近い死者を出した総力戦であった。「戦争を根絶するための戦争」に参戦したアメリカ・ウィルソン大統領は1919年1月、民族自決、無賠償、無分割などを提唱して、全世界から「平和の使徒」として歓迎されたが、半年後の講和条約では、平和の原則はことごとくふみにじられた。

（注14）三・一独立運動

1919（大正8）年3月1日「われらはここにわが朝鮮の独立と朝鮮人民の自由民であることを宣言する」との独立宣言とともに、朝鮮全土におよぶ独立運動が蜂起した。

1917年、ロシア革命によって帝政ロシアが打ち倒された今、日本が韓国併合の最大の理由はなくなったとし、ウィルソン大統領の「民族自決」を信じて立ち上がったが、独立を勝ち取る具体的手立てを欠いたため、わずか3ヶ月で鎮圧された。

（注15）独立宣言書

1918（大正7）年、富山県に始った米騒動は、日本の農民運動、労働運動、社会運動の勃興

力、平和運動でありました。そしてそれはキリスト教の運動でありました。それはたとえば、独立宣言の署名者33名のうち16名がキリスト教の信者であったことでもわかります。三・一独立運動に参加した人々の数は、韓国で200万人をこえ、そのうち7509名が殺され、16000人以上が負傷し、50000名以上が逮捕され牢屋に入れられ、あらゆる拷問を受けるといふ苦しみにあったのです。

その中の25%がキリスト教会の人々でありました。当時の韓国のキリスト教人口は、全人口の1%くらいでありました。

結局「三・一独立運動」は国際的支援のないまま、日本の軍隊によって抑圧されてしまいました。

しかしそれでも1920年代には、いわゆる文



写真は、独立万歳を叫ぶ女子学生たち

をうながし、在日朝鮮人にも影響を与えた。東京にいた朝鮮人留学生約600名は、早稲田大学の崔八鏞（チュ・パリヨン）らの指導のもとに、朝鮮キリスト教青年会館に集まり、独立宣言を発表、公然と独立運動ののろしをあげた。

化統治という名前のもとに植民地政策をいくらか変更していきました。

しかし世界的経済問題、帝国主義の拡張による植民地拡張戦争は、日本としてアジア全体に対する帝国主義的野心を持ち始める、そんな時期でありました。

朝鮮支配の実態

1930年代、日本の傀儡（かいらい）である満州政府を建てた後、韓国において新しい日本軍部の南次郎総督は、日本の大陸侵略と共に、韓国民族を日本化するために生きた人間であったと、私は思っています。

韓国の学校では、韓国語はつかえないし、「皇国臣民ノ誓ヒ」（注16）がおこなわれました。それを朝礼の時、暗唱させられたのです。創氏改名、神社参拝の強要、志願兵徴用そして女性挺身隊、慰安婦等々、植民地政策の最悪の時期でありました。

その時教会では、牧師さんたちに日本語で説教をすることを強要しました。それで日本語ができない私の父親は結局、朝鮮語で説教ができる国に行くため、私達の家族は満州に亡命する他、選択がなかったのであります。それだけではなく、聖書の中で、エクソドスとかダニエル書、そしてヨハネ黙示録といった政治的な話がある所はみんな除いて話さな

（注16）皇国臣民ノ誓ヒ

1937（昭和12）年10月、朝鮮総督府が制定したもので、小学生はいつも、

一、私共ハ、大日本帝国ノ臣民デアリマス

二、私共ハ、心ヲ合せ天皇陛下ニ忠義ヲ尽シマス

三、私共ハ、忍苦鍛錬シテ立派ナ強イ国民ニナリマス

を朗読させられた。大人たちには同趣旨の「皇国臣民ノ誓詞」があった。

ければなりませんでした。

そんなふうには日本の政府は韓国のクリスチャンを抑圧したのであります。

半島分断の悲劇

1945年は、私たちにとって日本の帝国主義からの解放の年であると同時に、それは韓国の国民においては、分断の悲劇をもたらした年でもあります。

半島の分断は、日本軍の武装解除のため臨時的に38度線の南へアメリカ軍、北へソ連軍というわけだったのですが、今それは世界で最も厳しい東西冷戦対立の「壁」になってしまいました。

分断線を間にして一時的な政府がたち、1950年には、600万以上の軍隊と民間人が犠牲になった戦争を3年間したのであります。

戦争をした南と北は、これまで40年の間、互いを世界最大の敵とし、思想戦争、および核戦争準備が完璧にできている状態です。

南で民主主義がはかどらないのも、分断のためであります。言論の自由がないのも分断のためです。学問の自由がないのも分断のためです。労働運動が犯罪になるのも分断のためです。

そしてこれまで30年間、軍部のクーデター政治が続けられるのも、また将軍出身者たち

が政権を司っているのも、この軍事的分断のためなのです。そして彼らが若い学生たちを拷問で殺すのも分断という理由で正当化できるのです。これが現在の分断の現実であります。

それで私達においては、分断というのはキリスト者の最大の敵であり、また十字架であるのであります。

平和への脅威

南と北の分断の問題は、韓国の民主化の問題とつながりますし、また分断を克服して、統一する問題は国内的、国際的において、平和定着の問題とつながっています。

分断の現実には、政治的民主化の障害物であり、100万の北の強力な兵力と直面して、60万を超える南の兵力とアメリカ軍の核による軍備、シベリアにあるソ連軍の対南ミサイルの配備、これは今まで40年近く、韓国の国内的、政治経済的負担であり、いつ破られるか誰にもわからない「平和への脅威」であります。

分断の克服というのは分断の壁を少しずつ低くすることであり、分断の壁を低くすることが平和への道であり、統一への道であります。分断の克服、この課題を私達の時代の最大の使命と認識しているのであります。

いたのでそうなったので、半島の両分は、やはり日本の責任であるというのが、私達と考えを同じくしている日本のキリスト者の告白と聞いています。

統一と平和をめざして

半島分断の責任を韓国キリスト者といっしょに持つというのは、日本のキリスト者たちが私達と共に分断の政治的十字架をいっしょに負っていくことであると思います。

分断の十字架のもとでへとへとになった韓国のキリスト者たちは、しかし復活の希望をもって働いています。

分断の苦しみからの復活はこの時代、この世界にあって、もっとも具体的な、そして歴史的な信仰であるのであります。

今あらためて強調しますのは、国際化時代において、そしてこの時代における半島の分断の克服は、アジアの平和の定着そのものであると思います。

半島の統一は、民族至上主義というショウビニズム、国粹主義の発想ではありません。韓国のキリスト者たちにとっては平和が最大の問題であります。平和のない統一は無意味です。そして統一のない平和は現状維持の緊張をそのままの嘘の平和、虚偽の平和にすぎないのであります。

日本も運命共同体

半島の統一がアジアと日本に重大な連帯関係があるのは、平和の問題であります。

半島の平和が持ち続けられない時、日本は核兵器と世界戦争と軍事費用の脅威(threat)のもとで生きるほかないという、共同の運命を持っていると思います。

国際化時代において、韓国の平和と半島の統一は日本の平和と安全の問題であり、またアジア全域において世界の平和の問題といっしょにつながると考えています。

統一の問題を取り上げる時、韓国のNCCは、平和と自主、民族団結という三大原則を取り上げて、その上に民衆が参加する統一の問題、そして、人道主義原則を加えて進行することを宣言し、南と北の政府に対して、平和定着のために、不可侵条約、平和協定、軍備縮小、核撤去、アメリカ軍の撤収など、具体的提案と共に、南と北のキリスト者の交流と聖餐式への招き、共同礼拝の開催、離散家族探しへの協力などを提案して、北の支持を受けています。

そして韓国のノ・テウ大統領は昨年7月7日、北への呼び掛けで敵対関係でなく、同伴者としての関係を約束して、民間人の交流を奨励をするという宣言をしたのであります。

しかし今年の夏、北のピョンヤンでおこなった世界青年の祭りへ、政府の許可なしに、南の大学生たちを代表して参加したイム・スーギョンという学生、そして彼女を連れて帰ってきたムン・スンフョン神父、また彼女のピョンヤン行きを支援した三十余名の学生たちが今、韓国の牢屋で苦しんでいます。

(注20)

しかしこういうことがおこっていると同時にまた一方、南と北の政府は別れている家族の再会のため会談を続けているのが現実であります。

1995年にこそ

韓国のキリスト者たちは1995年を、分断50年であるということ認識して、「ヨベルの年」「ヨベルの7回目の安息年」として(注21) イエスが宣言した待望の年、その恵みの年、この年を「統一と平和の年」と決めています。

6年後のことではありますが、これは私たちにおいては夢だけではありませんか。

アジアにおける国際化時代の到来は、その初めを、不幸にも日本の帝国主義が拡張して、そしてアジアの方向に日本の帝国主義の手がのびはじめた、それと同時にアジアにおける国際化時代というもの came と思いま



(注20)

1989年7月1日から平壤で開催された第13回世界青年学生祭典に韓国の全国大学生代表者協議会を代表して林秀郷さん(韓国外国語大学4年)が参加。祖国統一のために共に戦うとの南北学生宣言を発表した。8月15日、板門店をこえて、文奎鉉神父とともに帰国したが、国家保安法違反で逮捕され、ことし2月、ソウル地裁で林さんは懲役10年、文神父は同8年の判決が下された。

す。

朝鮮と中国、台湾、インドシナとインドネシアと太平洋の真ん中の粒のような小さい島々にいたるまで日本軍隊の軍靴の印がいたる所がありました。

25年の歴史を持つ名古屋学院大学の若い学生たちには、その帝国主義の侵略の責任が、全くないのであるとすることができるでしょう。

しかしアジアの若い学生たちは、この国際化時代において、アジアの平和とアジアの貧困の問題とアジアの正義の問題は、日本の責任であると認識しています。

戦前の年代、世代、みなさまのお父さんたち、私と同じ年をしている人達は、軍事的にアジアを植民地化し、世界大戦の犠牲としたといえば、いまの若い学生たちはアジアの経済的帝国主義の責任を持っていると考えているのが、韓国の、そしてアジアの学生たちの考えであります。

歴史的責任の自覚を

国際化時代におけるキリスト教の使命は、まずこの歴史的責任意識を持つことだと思います。この歴史的責任意識というのはアジアの40億人口のうち3%の日本人が持っている経済力とつながるのであります。

(注21) ヨベルの年

ヨベルとは、雄羊の角で作ったラッパのこと。イスラエルでは、神が天地創造を終えた7日目にすべての労働を休んで、安息したことにちなみ、7年目を「安息年」と定め、安息年を7回経た50年目には、すべての耕地が休閑し、売られた土地が返還され、負債が免除され、奴隷は解放されると定められてきた。この年、ヨベルの角笛が吹き鳴らされたことから「ヨベルの年」という。

アジアに対しての戦争の責任を、平和の実現をもって払わないといけないと思います。日本の軍部政府は1930年代と40年代、「大東亜共栄圏」(注22)というスローガンで、太平洋の平和のためと言いながら、戦争を起し、アジア全体を戦争の痛みの中へ押し入れたのを歴史は知っていますし、その歴史を忘れることはできません。

大東亜共栄圏、それは日本がアジアの国々を軍事的に、政治的に、経済的に支配し、アジア人を天皇の赤子(せきし)と考えるというものでしたが、これからはそういう帝国主義的考えでは駄目だと思います。

国際化というのは、植民地化ではありません。ほんとうの国際化時代というのは、そしてアジアの平和の時代というのは、自主的、独立的国家と民族たちがそれぞれの文化を楽しみ、それぞれの文化を尊重する、そういう時代のことです。

長い間のアジアの戦争の責任を負っていかねなければいけない日本の知識人とキリスト者たちは、アジアの平和のため、アジアの国々の経済的独立と文化的繁栄のため、重い責任を持っていると思います。

国際化時代における日本のキリスト者たちの責任はアジアに対する支配欲から、日本人を解放させ、アジアの平和のため、アジアの貧しい民衆のため、働くことだと思っています

す。

日本の隣人はアジア

国際化時代において日本のお隣りはアジアであると思います。

25周年、25才の誕生日に、外国語学部が開設されたのは、名古屋学院大学の世界に対する責任意識を、内外に表明する立派なことだと、深い感激をもって受けとめています。

今までの日本は、その目を西に向けていました。西洋の言葉と、西洋の文化と文明を習い、そしてその西の文明をイミテーションすることで、優越感を、またそれができないことに対して、コンプレックスを持っていたのが、日本の学問のトレンドであったならば、今からは、西から東に、アジアにその方向を転換する必要があると思っています。

韓国語をはじめ、10億の人民の言語である中国語、経済的に、政治的に圧迫され、いじめられたアジア民衆の言葉を習い、その文化とその歴史の中で、平和のために働く、若い人達が名古屋学院大学の外国語学部から出てくるのを期待しています。

皆さんはアジアの言葉を

私が日本語を使うのは、今までは恨みがあ

(注22) 大東亜共栄圏

アジア諸国を植民地としていた欧米を追い払い、日本が君臨することによって、アジアの自立、自給をはかろうとする構想で、1940年、第二次近衛内閣が決定した。

アジア諸国への侵略を正当化するためにつくりだされたスローガンだが、現実には、アジア諸国は日本に抵抗することで独立を達成した。

「おもうに今次の大戦は、自存自衛のため日本国の存亡をかけ、虐げられた民族の解放と万邦共栄を願っての聖なる戦いであつた……」この文章は、1982年、福岡市の国有地に建てられた慰霊碑に刻まれた一節である。いまだに、大東亜共栄圏的発想が生き残っており、戦争に対する反省が全くないのは驚きである。

るので使っていました。それで日本に来る時は、空港で、食堂で、ホテルで、英語を使いました。しかし今は、もっとすばらしい、丁寧な日本語を習うつもりです。

アジアの平和のため、原爆と核戦争から生き残るためにも、私の日本語はもっと丁寧な日本語にする必要があると思っています。

しかし私の日本語より、もっと必要で重要なのは、みなさま若い人達の上手で、ていねいな韓国語、中国語、タイ語、インドネシア語、それらがもっと必要で重要です。

そしてその言葉よりもっと必要なのは、日本人の人達といっしょに住んでいる在日韓国人との正義と平和的生活だと思います。

日本人の人達が今いっしょに住んでいる韓国人と仲良く住めないのに、どうして他のアジアの人達が日本人を信頼して、そして日本人を友達としてうけとることができるか、そんな質問をアジアの人々は持っています。

私の、私たちの夢

先に韓国のキリスト者たちは、1995年、韓国の解放50年、日本敗戦50年、朝鮮半島分断50年、それを記念する年を聖書的に「ヨベルの年」と決めて、半島の統一と平和のために働くこと約束したことを申し上げました。

それで1995年、今から6年後には一つの国

家の体制で、それができなければ、どんな形でもいいから、気楽に南と北を往来できる平和な韓国を夢見ているのが私たちの夢です。1995年になると、その年私は引退する年ですが、北のピョンヤンの丘に、父親の墓を探して、涙を流すつもりです。

皆さんといっしょに、アジアと世界と韓国の平和のために働き、お祈りしたこと、神様の歴史に参加させていただいた感謝の涙をいっしょに流すつもりでいます。

そして昨年ソウルであったオリンピックの歌、Hand in hand, We can start to understand. Breaking down the walls. That came between us for all times……手に手を取って……分断の壁、南と北を分ける壁、日本とアジアの民衆を敵にする高い壁、あらゆる高くなった心の壁、その分断の壁を、手に手を取って、Hand in hand 打破る Break down する、神様の歴史の仕事に参加するのが、国際化時代における私たちキリスト者の使命であると思っています。

<お断わり>

1. 本文は徐先生の講演テープをもとに、編集者の責任において、文意をそこねない範囲で手を加えました。
2. 脚注、地図、写真は読者の便宜をはかるために編集者の責任においてつけ加えたものです。
なお、写真と地図は新聞の切抜きをのぞいて「別冊一億人昭和史 日本植民地史①朝鮮」（毎日新聞社）から転載しました。
3. 表紙カットは、本学学生 92E武岡 基君の手によるものです。

名古屋学院大学
開学25周年・外国語学部開設

記念講演会

国際化時代における キリスト教の使命

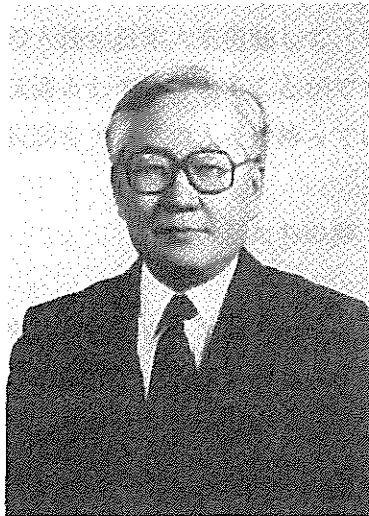
— 韓国の視点から —

とき 10月9日(月)午後2時～3時半

ところ 名古屋学院大学チャペル

講師 韓国・梨花女子大学教授

ソ クワン ソン
徐 洸 善 氏



韓国・梨花女子大学教授

徐 洸 善(ソ・クワンソン)氏プロフィール

1931年日本植民地下の朝鮮に生る。父が日本官憲の弾圧に抗して海州にてキリスト教伝道に従事したため、彼地の日本人中学校に進学するが、3年生にて解放を迎える。その後、父は北朝鮮平壤にて殉教、南北分断の悲劇を体験する。1966年ニューヨーク・ユニオン神学校にて神学修士、1970年ナッシュビル・ワンダビルト大学より宗教および哲学にてPh. D.を取得。

1964年梨花女子大学講師、1974年教授。1978年から80年まで同大学文理科カレッジ学長。現在同大学キリスト教学科にて宗教および哲学を講じるとともに大学チャプレンの要職にある。

1970年代の韓国民主化闘争には積極的に参与、その実践の中から生れてきた「民衆(ミンジュン)の神学」構築の代表的神学者として韓国、日本においてのみならず世界のキリスト教神学界に広く知られている。

著書：『世俗的世界における信仰と知識』(1971、1980)

『人間と宗教』(1975、1986)

『韓国キリスト教への新理解』(1985)

Theology, Ideology and Culture, 1983

『民衆の神学』(共著、邦訳、1984)

その他多数の著訳書、論文がある。

チャペル ブックレット 発刊にあたって

本学の開学(1964年)以来、宗教部では毎年、春と秋に「宗教週間」を設けて、折りにかなったテーマと講師を与えられて、学生諸君と共に学んでまいりました。

その講演内容は、宗教部の機関紙「麦粒」に掲載してまいりましたが、貴重な講演を、いつでも手にとって読める形にまとめてはどうかとの提案を受けて「チャペルブックレット」として発刊することにいたしました。

このチャペルブックレットが、本学の学生諸君をはじめ、多くの方々に刺激を与え、問題を提起し、より深い認識と行動へかりたてるきっかけになることを願っています。

1989年11月

宗教部長 梶原 寿

チャペルブックレットNo.3

1990年5月25日発行

編集・発行 名古屋学院大学 宗教部

瀬戸市上品野町1350

〒480-12

TEL 0561-42-0348

印刷 坪井印刷合資会社

主催/名古屋学院大学  宗教部/企画室

1,000

チャペルブックレット

●既刊

- No. 1 経済の論理と人間の論理
エコノミック アニマル日本
恵泉女学園大学教授 塩 沢 美代子
- No. 2 心を問い続けて
北海道家庭学校校長 谷 昌 恒
- No. 3 国際化時代におけるキリスト教の使命
韓国の視点から
梨花女子大学教授 徐 洸 善